

僕たちの

失敗※

石川達三

僕たちの失敗

僕たちの

失敗 ✕

石川達三

定価八〇〇円

昭和三十七年二月二十八日 発行

昭和五十年四月十五日 二十九刷

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一番地

電話 業務部(〇三)二六六一五一一

編集部(〇三)二六六一五四一一

振替東京四一八〇八番

印刷多田印刷株式会社

製本神田加藤製本

© 1962 T. ISHIKAWA Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。



結婚について

結婚ということについて、僕は懷疑的だった。懷疑的ではあったが、否定的ではなかった。結婚は、否定するわけには行かない。否定したら人類は絶滅するし、第一、人生がおもしろくない。たゞ、どういうかたちで結婚するか、どんなかたちの結婚生活が現代の僕たちに最もふさわしいか。そのことにはいろいろ問題がある。僕はその事で悩んでいた。しかしそういう悩みは、あまり苦しいものではなかった。

僕は伊吹まさ子を愛していた。愛していたということには原因もなにも無い。好きになったから好きになっただけのことだった。僕は恋愛が神聖だなどと思ったことは一度もない。むかしの詩人は恋愛を美化することが好きであつたらしいが、僕はなにも恋愛を美化しなくてはならないとは思わない。恋愛は本能から出発した感情であるのだから、

動物的だ。恋愛が神聖たと言うのなら、鳥やけだものの行為もみな神聖だということになる。僕はそういう風にひねくったり美化したりごま化したりしたくない。在るがままの自然な姿で恋愛を考えて行きたいと思っていた。

しかし僕は伊吹まさ子を愛したことによって、まさ子を実際以上に買いかぶったり、理想の女性、完璧な女性みたいに幻想したりしたことが、無かったとは云えない。まさ子はすこし背丈がひくかったが、僕は、そのくらいがちょうど可愛い背丈だという気がした。僕よりも大きいような女は女みたいな気がしない。それから、まさ子はすこし気が強くて我儘なところがあった。僕はそれを、まさ子が梶口なせいだと考えていた。そんなことはどう考えようと僕の勝手で、誰に迷惑がかかることでもない。他人に迷惑のかゝらない事ならば、僕は何をしてもいいと思っていた。

僕はあるとき、仲間の稲垣次郎にむかって、結婚ということについて懷疑的になっていることを話してみた。すると稲垣はひやかすような笑い方をして、こう言った。

「馬鹿だなあ福田。結婚というものは二人でするものなんだよ。お前がひとりで懷疑的になっていたら、相手がどう思っているかわからんじゃないか。」

お前の相手は伊吹まさ子だろう。あれは個性的で梶口

な子だ。俺なんか、とてもじゃないが身がもてないよ。

お前は大学出だからいゝかも知れんが、向うはどうなんだい。やっぱり懷疑のか。二人で懷疑のなつていたんじや、結婚はだめだな」

なるほどそうだ、と僕は思った。僕は懷疑のなつてはいたが否定的ではなかった。本当は何とか合理的な、納得できるような形式と方法を発見して、結婚したかった。結婚ということはずいぶん楽しいことに違いないと思つてゐた。しかし結婚の失敗ということも無数に実例がある。失敗したらどうするか。僕は要心ぶかい性質であつたから、先の先まで考へてみるのだった。しかしいくら要心ぶかく考へていても、失敗することは必ず有る。失業、病氣、経済不況、災難、戦争。僕の力でそのすべてを防ぎ止めることなどは、とうてい不可能だ。

僕は稲垣次郎の忠告にしたがつてみようと思つた。つまり、ひとりで懷疑のなつて居たつて結婚はつかないから、二人ではなしあつて見ることにした。それで、二人の意見がまるで違つていて、妥協の余地がないものとわかれれば、僕の恋愛はそこであきらめるべきだと思つた。

恋愛というものはそういうものであるべきだ。二人のあいだに妥協の道がなければ、その恋愛は整理してしまふべ

きだ。そして他にあたらしい対象をもとめるべきだ。要するに恋愛というものは一つの過程であり手段であつて、それ自身が目的ではないのだから、結婚の可能性がまったくないときには、恋愛だけにこだわっているのは愚劣だと思つた。だから、早く伊吹まさ子と話し合つてみて、可能性があるならば局面を進展させる、可能性がなければ彼女の幸福を祈つて、握手をして別れる。それが一番手つとり早い方法だと思つた。

そこで僕は或る日、工場が引ける前に係長にきいてみた。

「今日は残業、ありますか」

「無いよ」

「全部無いんですか」

「経理が残業だと思う。決算期だからな」

「女工は無いですか」

「無いよ。何だつてそんなことを訊くんのだ」

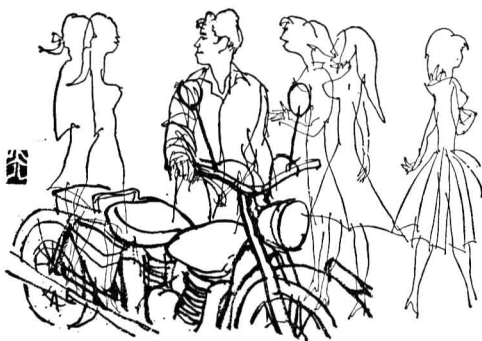
僕は終業と同時に手を洗つて飛び出した。女子工員は着物を着かえたり化粧をなおしたりするから、必ず十分ぐらい遅れる。僕はオートバイを曳き出して工場の出口にまわつた。そして、そのあたりを小さく旋回しながら待つてゐた。女たちがぞろぞろと出てくる。

「福田さん乗せて……」と組立部の女工が言う。

「だめだよ。人を待ってるんだ」
「知ってるわ。伊吹さんでしょう」

「うるさいな。早く帰れよ」

女の子は憎たれ口をきいて、行ってしまう。僕は良い氣持だった。僕は、もしも伊吹まさ子にことわれたらどう



六

するか……そんなことは考えていなかった。こととられることも当然ある筈だ。彼女に愛人があるかも知れない。また健康上の理由もあるかも知れない。僕はそんなことを一切考えていなかった。こととられたら問題は白紙にかえる。僕が伊

吹まさ子を受しているという事実だけが残るが、これも白紙に返すべきだ。そういう風に自分の心の整理をつけるべきだ。（整理がつかなくなったらどうするか。どうしても思いつけなかったらどうするか）……そんな事は僕は考えていなかった。整理してしまえばいいのだ。

やがて伊吹まさ子が友だちといっしょに出て来た。短いダスターコートの下に緑色のチェックのスカートをはいている。しゃれた姿だ。僕を見つけて少し笑った。僕はたゞ単純にうれしくなった。僕は恋愛がはずかしい事だとは思っていない。だから誰かに知られたくないという気持もっていない。僕の父ぐらいの年齢の人たちは、恋愛を神聖だと思っていたらしい。そのくせ恋愛をはずかしがっていた。矛盾したはなしだ。僕はハンドルを廻して伊吹まさ子の眼のまえに車を持って行った。

「伊吹さん、乗らないか」

伊吹まさ子は一瞬、立ちすくんだような格好だった。急には返事ができなかったらしい。すると一緒に歩いていた仲間の女工たちが口々に、あぶないからだめだとか、男の誘惑に乗ってはいけなとか、やかましくしゃべり立てた。おしゃべりの全部は、乗ることに反対の意見だった。つまり全部の女たちが一斉に軽い嫉妬を感じていたのだ。しか

し、そのために却って伊吹まさ子は決心がきまったらしかった。

「どこまで乗せて下さるの？」と彼女は言った。

「君のうちまで送ってあげるよ」

「大丈夫かしら」

「大丈夫だよ。殺しやしないよ」

まさ子は黙ってオートバイのうしろの、小さな席になゝめに腰をかけた。女たちがまた騒いだ。僕は走りだした。工場の門から道路にあふれた何百人という男工女工の群を左右にかき分けて、僕は快適に走った。

「しっかりとつかまって居るんだよ」と僕は言った。「僕のベルトにつかまるんだよ」

まさ子は僕の腰のうしろのところのベルトに手を入れた。僕は走りながら、ベルトにつかまっている彼女の手を愛していた。僕はまだ一度もその手に触れたことは無かった。一人のときと違って車は重かった。その目方がまさ子だった。僕はその目方を愛していた。僕は何となく、もはや伊吹まさ子は赤の他人ではないような気になっていた。僕のオートバイが、まるで花で飾られた二人の結婚の馬車みたいだった。

三分ばかりも僕は黙って走った。何か言いたかったが、

どういう言い方をしたらいいのか見当がつかなかった。そのとき伊吹まさ子がうしろから僕に声をかけた。

「福田さん私に何か、用があったの？」

あゝ俐口な女だ、と僕は思った。僕がなにも言わないうちに彼女はちゃんと察していたのだ。そして、僕が言い出し兼ねていることを知って、向うから発言の機会を与えてくれたのだ。僕は急に元気づいて言った。

「そうなんだ、用があるんだよ。折入ってな、相談したいことがあるんだ」

今度はまさ子は黙っていた。黙っているのがつましきだった。黙っていることが、僕の言いたいことの内容を知っている証拠だった。同時にまた、いつでも拒否することができるように、一歩しりぞいて相手の様子を見ようとすると、女らしく要心ぶかい態度でもあった。

「実を言うとな、伊吹さん……」と僕は大きな声で言った。大きな声でないと、うしろの人には聞えにくいからだった。「実はね、急にこんな事を言ってすまないけど……僕は君と結婚したいと思っているんだよ。だからさ、一つ考えてみてくれないか」

オートバイは四十五キロの速力だった。広い道路の街路樹のみどりが流れるようにうしろに走っていた。伊吹まさ

子はだまっていた。しかし彼女の両手はしっかりと僕のベルトにつかまっていた。僕はもう一度声をかけた。

「ねえ伊吹さん、考えてみてくれないか」

「考えてみるわ」と彼女は言った。「でもわたし、福田さんのこと、なんにも知らないのよ」

僕はふっとかなしい気持ちになった。(福田さんのこと、なんにも知らないのよ)というまさ子の言い方が、とても純真で、可愛かった。

「知らなくたっていいんだ。段々に解ってくるさ」と僕は言った。「僕だって君のことを、たくさん知っているわけじゃないよ。だけどね、お互いに好きならそれでいいと思うんだ」

恋愛というものは、おたがいによく知っているから愛するというわけのものではないと思う。好きになる動機などは、きっと単純なものだ。好きになってから相手を知りたくなる。それからたくさんさんの知識をむさぼる。そして、知れば知るほど好きになって行く。何だって良い方にばかり解釈してしまうからだ。つまり、自分勝手にまちがった解釈をする。そのまちがいは、結婚してから徐々に姿をあらわして来る。だまされていたような気がする。だから恋愛結婚というものは、案外に命がみじかい。

みじかくてもいいじゃないかと僕は思った。みじかくても、その間に充分に楽しい時間があるに違いない。一生つづいた結婚が必ずしも立派で理想的であるとは限らない。僕はみじかくてもいいから楽しい結婚生活をもちたかった。

要するに恋愛というものを、僕はあまり信じてはいなかった。日本中に女は何千万人も居るのだ。偶然にそのなかの一人を発見した男は、これが自分の理想の女性だと信じてしまう。信じるだけの根拠がどこにあるかというところにもない。理論的には有り得ないようなことを、恋愛する人はかんとんに信じてしまう。そして、眼が美しいとか、声がきれいだとか、笑顔がたまらないとか、愚にもつかない理由をならべ立てる。ところがそんなものは日常生活とは根本的には何の関係もない、アクセサリーにすぎないのだ。

そんなことは解っている。わかっていくくせに、僕は財布のなかの最後のおかねで、米を買おうとはしないでカーネーションを買うようなことをしてしまうのだった。僕たちの年齢では、時として、米の飯よりも花の方がほしいこともあった。そういう不合理が美しいのだ。僕は不合理の魅力に曳かれて、伊吹まさ子を受愛していた。いつまで続く

かは知らないけれども、僕は彼女に溺れてゆきたかった。もつと本当のことを言えば、彼女に溺れてゆくところまで、自分を溺れさせてやりたかった。

ゴー・ストップで止ったとき、僕はふり向いて言った。

「オートバイ、好きかい？」

まさ子はほのかに笑って、うんとうなずいた。子供みたいな返事の仕方だった。荒々しい風に吹かれて、彼女の頬は赤くなっていた。まつ毛の長い、きれいな眼をしていた。

「君のうちに、何か飲むもの、有るかい」

「番茶だけしか無いわ」

「番茶、ごちそうしてくれるかい」

「えゝ……だけど、私のうち、男の人なんか来たこと無いのよ」

「いゝじゃないか。番茶飲んだらすぐ帰るよ」と僕は言った。

「その郵便局のところを左へまがるの」とまさ子はうれしそうに言った。「曲ってから左側の、五軒目」

伊吹まさ子は小さな木造アパートに住んでいた。六畳に台所がついただけの貧しい部屋だった。僕は部屋のなかをじろじろ見まわした。彼女はガスで湯をわかし、僕のため

に番茶をいれてくれた。それから黒砂糖の飴を出してくれた。

僕の下宿とちがって女の部屋というものは、ひとりきりでも一応は家庭のかたちをしているものらしかった。こゝに僕が坐って居れば、もう新しい家庭とおなじことだった。して見ると、家庭というものは女が造るものらしいと僕は思った。女と子供とを入れて置く場所が家庭であって、男なんか本当はどうでもいいらしい。

工場で見るときの伊吹まさ子は、たくさんの研磨機（けんまき）とりかこまれて、忙しそうに立ちはたらいで居る。しかし機械と彼女とは関係がない。彼女は孤独だ。終業時間がくると機械はとまる。彼女は帰り支度をする。それで終りだ。一生おなじ職場ではたらいににしても、機械は機械、女工は女工。彼女はどこまでも孤独だった。

しかしいま、この部屋の中で見る伊吹まさ子は、まるで違っていた。茶道具も机も鏡台もカアテンも、彼女のものであり、彼女の付属物であり、血が通っていた。彼女が留守のときでもこれらの家具はやはり彼女のものであり、彼女の匂いをふくんでいるだろう。そして、それらの家具にとりかこまれて坐っているとき、伊吹まさ子は女らしく、落ちついていた。女というものは、身のまわりの沢山の道

具類や衣類にとりかこまれているときに、一番完全に女であるらしいと僕は思った。僕はそういう生き生きとした彼女の姿を見て、すこし彼女を理解したような気がした。

「ほんとに、まじめな話なの？」とまさ子は伏目になって言った。

「僕はまじめだよ。だから一つ、具体的に相談して見ようじゃないか。事務的なことから言うと、第一に僕は、誰もほかに婚約もしていないし、恋愛関係もないんだ。君は誰か特別にしたいとか、約束をしたとか、そういう人が有るかい」

「手紙をくれた人なら有るわ」

「ひとり？」

「三人ぐらい。でも返事は出してないの。何も無いと同じよ」

「過去に於ては？」

「何も無いわ」

僕はそれから二人の健康状態について話しあい、何の故障もないことを確かめた。次に、僕の職業について、まさ子の方に不満とか注文とかが有るかどうかを確かめた。

「僕はあまり出世はしないよ。係長までなら確かだが、部長まではどうかな？」

「そんなことは、別に何でもないわ」とまさ子は言った。

その次に僕は二人の収入をたしかめてみた。僕は毎月二万三千円から四千円。残業によって多少の変動がある。伊吹まさ子は一万五千円見当だった。

「すると二人で三万八千円か九千円だ。ゆっくり暮せるな」

「そうね……」まさ子は気乗りのしない様子だった。

それから彼女は変なことを言った。

「福田さんは大学出だって誰か言っていましたけど、本当ですか」

「あゝ、本当だよ」

「それじゃ、駄目だわ」とまさ子は小さな声で言った。「あなたはどんどん出世して、工場長になったり重役になったりするでしょう。私は高校の中退で、学問も教養もないから、その時になったら、あなたに棄てられるわ」

「ばかな事を言うんじゃないよ。僕はたゞの職工じゃないか。それに、万一重役になったにしても、それは三十年も先のはなしだろう。それまで君は生きてるかどうかも解らんじゃないか。もしも戦争がおれば、原爆でもって日本が全部ふっ飛んでしまいかも知れないんだ。そんな、先の先の先のことを心配して、そのために現在の幸福を棄てる

という法があるかい」

「そうね」とまさ子は言った。「いゝわ。福田さんが重役になったら、棄てられてもかまわないわ。わたし、煙草屋か駄菓子屋の店でもひらいて、何とか暮して行きます。男の人なんて、頼りにならないもの……」

「そうさ。女だって男だって頼りにはならないよ。うまく行かなくなったら仕方がないんだから、巧く行くあいだ丈けでも楽しい家庭を持てばいゝと思うんだ。そうじゃないか」

まさ子は黙ってうなずいた。

僕は大学の法科を卒業した。なまけものの学生であったから、法律家にもなれないし外交官にもなれなかった。だから平凡な役人になるのが一番いゝと思った。役人は特別な落度がないかぎり、停年までは首を切られることがない。ベース・アップ要求のストライキのときなどは、知らん顔をして居れば、なまけ半分勤めていても何とかやって行けるだろう。そこで法務省の試験をうけてうまい具合に合格し、官庁づとめをはじめた。

それが僕の第一の失敗だった。役人というものは首を切られることが無いかわりに、無数の規則や法律にしばられているのだった。その規則や法律におとなしく縛られた人

間だけが停年まで月給をもらえるという仕掛けだった。僕みたいな我儘な人間にはとてもつとまるところではない。

僕は九カ月と十日で、依願退職した。僕は出世を望むよりも自由を望んでいた。自由な仕事がどこかにないかと考えて、見習いの工員になろうと思った。僕は工員募集広告を見て、アルプス・カメラの工場へ行ってみた。僕はラジオやテレビの組立を学生時代にさんざんやっていたので、すぐ採用された。

そして最初はファインダーの調節の仕事、次に研磨機の仕事、それから本工員になって、レンズのコーティングの部屋にまわった。工場の仕事は単純で、誰にだって出来る。カメラ工業は景気がよかったから、給料も案外よかった、ボーナスもよかった。

僕は年末のボーナスで中古のオートバイを買った。通勤の電車が無茶苦茶に混雑するから、もう電車などのお世話になるまいと思って買った。朝の電車は人権を無視している。僕はなまけ者だけれども、自分の人権だけは大切に考えていた。だから伊吹まさ子の人権をも大切に考えていた。

一週間ばかり経ってから、僕は工場の帰りに稲垣次郎を

さそって、焼鳥屋でビールを飲んだ。稲垣は僕より一つ年下の二十六だが、二十四のときに結婚して、もう秋には父親になる予定だった。もっと正確にいうならば、(父親にならせて貰える予定)だった。つまり女房が母親になるから、それと同時に彼は自動的に父親になるのであって、彼が自分の意志と努力とで以て父親になるわけではなかった。すべて女房のおかげだった。

「どんな気持だい」と僕はきいてみた。

「それや君、何ともいえない気持だよ。つまり、何というのかな、俺のあと継ぎだからな」と彼は言った。

「あと継ぎか。……何を継がせるんだい。君の、あぐらをかいた鼻のかたちか。それとも君の、酒好きな胃袋か」

「何とでも言うがいい。君には父親の心境はわからないよ」

「解りたくないね」と僕は言った。「僕は結婚することにきめたけれども、子供は産まないつもりだ」

「え？ 結婚するのか」と稲垣は叫んだ。「伊吹まさ子か」

「もちろんだよ」

「ふむ……よく彼女は承知したね。伊吹まさ子に求婚した男を、僕は四人ぐらい知っているが、全部ことわられたんだ。なかにはずいぶん良い条件を持って行ったやつも居る

んだよ。新婚旅行は飛行機で北海道に行って、阿寒湖と大雪山と登別温泉をまわって帰るとかね。貯金があるから二十坪ぐらいの家を新築して彼女を迎えるという話もあった。もちろんみんな、生涯変らざる愛の誓いを立てたわけだが、それでも駄目だった。福田信太郎は一体どんな条件をもち出して彼女を口説き落したんだね」

僕は良い条件なぞ一つも持ち出さなかった。持ち出したくても、そんなものは何もなかった。むしろ悪い条件ばかりだった。悪い条件を持ち出したのが却って良かったかも知れないのだ。

「僕たちはね、三年間の約束で結婚するんだよ。三年経って、もうお互いにたくさんだという気持だったら、文句なしに別れよう。しかし三年たったあとで、二人とも、もう少しいっしょに居たいと思うようだったら、一年ずつ一年ずつ約束を延ばして行こう。そういうことにきめたんだ。合理的だと思わないか」

稲垣次郎はながいあいだ黙って考えていた。彼は多分、自分の結婚生活と僕たちの約束とを比較していたらしい。それから僕にむかって、

「伊吹まさ子は、そんな馬鹿な条件で結婚を承諾したのかい？」と言った。

「もちろん、承諾したよ」

「そうか。可哀そうに……」と稲垣は言った。「あいつはよほど君が好きなんだね。しかし君は大学を出ているし、とても正式な奥さんになんか、してもらえないことも知っているんだ。だから、三年たったら君に棄てられることを覚悟で、たった三年でもいゝから、君と一緒に暮して見たかったんだね。ひた向きな女ごころだ。可哀そうに。……それに引きかえ、君は悪いやつだ。女たらしだよ」

「冗談じゃないよ」と僕は言った。

「それは君、言いがかりと言うものだ。僕は伊吹まさ子を本当に愛しているんだよ。」

しかし、僕は誤解されることを恐れずに、正直に言うんだけど、人間の愛情というものを君はどんな風に理解しているんだね。殊に愛情の永続性ということについて、君は確信のあることが言えるかね。君は自分の女房を、これからさき三十年もそれ以上も、変ることなく愛して行けるという自信があるのか。

男だって女だって、生きものだからね。三年たったら人間は変ると思うんだ。変る方があたりまえで、変らなかつたらおかしいよ。たとい神様のまえで誓いを立てて結婚したからって、お互いに嫌になることもあるよ。嫌になつて

から、それでもまだ一緒に暮している夫婦なんて、悲劇だからね。僕は悲劇はいやなんだ。たった五十年か六十年の人生を、悲劇的に暮すという法はない。

結婚というものは、楽しい間だけ続ければいゝんだ。三年のあいだにはいろいろな変動があるだろう。経済状態も社会状況も、思想的にも、職業的にも、変化はおこってくる。ほかに好きな人が出来たという場合もある。そういうたくさんの変化に応じて、生活のかたちも変って行くのが当然じゃないか。世の中がどんなに変わっても、二人の結婚生活だけは変らないという訳には行かないよ。戦争未亡人、引揚げ未亡人、戦災未亡人、そういう未亡人が戦後にはたくさん居た。つまり社会の変化のために結婚生活がこわされたわけだ。

要するに、愛情の永続性ということも僕は信じ得ないし、外部の社会の変動に応じて、生活のかたちを変えて行くことが必要だということも考える。そうすると、こんな風に変動のはげしい時代には、生涯の結婚を誓うことは、実行できないことを誓うのだということになる。一つの例をもつて言えば、現在の政府はまた徴兵制度を作ることを考えているらしい。それが実現して、僕が兵隊に引っぱられて、戦死でもしたらどうなるか。僕の誓いは嘘の誓いであつた

ことになる。

僕が伊吹まさ子と、三年の約束をしたことは、僕の一番正直な良心からだ。彼女を裏切りたくないからだよ」

稲垣次郎はビールをがぶがぶ飲んで、すこし酔いを発してきたらしかった。

「君は大学出だから巧いことばかり言うが……」と彼は言った。「そんな言い訳で俺はだまされない。君がいくら学問があつたって、そんな理窟でごま化されるもんか。要するに君は三年目三年目に女房をとりかえて、年じゅう新しい女房と暮して見たいという訳で、そういう巧い理窟を考え出したんだ。そうだろう。君は色事師の知能犯だ。」

三年目三年目に棄てられる女のことを考えて見ろ。傷ものにされて、路頭に迷つて、一生君のことをうらみながら、だんだんうらぶれて行くんだ。それでも君は平気なのか。俺は反対だ。俺は伊吹まさ子に忠告して、この結婚をやめさせてやる」

「おいおい、待ってくれ。無茶なことを言うな」

「何が無茶だ？……君の方がよっぽど無茶じゃないか。俺は三年さきで、伊吹まさ子が君に棄てられた時の姿なんか見たくないんだ。俺は弱き者の味方だよ」

「誰が棄てるといった？」

「体裁のいゝ理窟をつけたって、要するに棄てるんじゃないか。それがうそだと言うのなら、生涯つれそうで行つてみる」

僕は稲垣という男を見損つていたようだった。もっと話のわかる男で、もっと近代的なセンスを持った男だろうと思つていた。だから僕は、僕たちの新しい約束などを打ちあけて話したのだった。賛成してもらえらるだろうと思つていたのは僕の誤算だった。

「だからさ、わからずやだな。もう少し聞いてくれよ」と僕は言った。「僕はね、結婚というものを、もっと軽く考えたいんだよ」

「何だつて？……結婚におもたい結婚だの軽い結婚だの、そんなものが有るかい」

「黙って聞け」

「聞く必要ない」

「裁判官だつて被告の言うことを聞く義務があるんだ。……いゝか。僕はね、神様のまえで誓いを立てて結婚したのだから、もう一生別れることが出来ないなんて、そんな重苦しい考え方には反対なんだ。僕が反対するだけじゃない。第一不合理だよ。」

いまのように変動のはげしい時代には、生活全体を軽く

して置くべきなんだ。重苦しい生活様式をとって居たら動きが取れない。たとえば、昔の職業には転勤ということは滅多になかった。今は官吏でも会社員でもやたらと転勤がある。だから、つとめ人は、先祖伝来の家屋敷だの田地畑だのというものをかゝえ込んだ、重苦しい生活はしていられない。財産は貯金帳と株券だけという風な、身軽な生き方が必要なんだ。

結婚生活だってそれと同じだよ。インフレが来る、革命がおこる、天災地変がおこる、戦争がおこる、原爆実験の灰が降る、人口過剰で住むところもない。そのうえ失業と交通事故。殺人強盗と暴力団。どうにもならん世の中だ。そういう世の中で、巧く安全に生きていくにはどうしたらいいか。身軽な生き方をするより仕方がないんだ。

僕は政治家なんていうものは信じないし、いまの政治も信じていないよ。そんなものを頼りにして居た日には、命はいくつ有っても足りないからね。自分の命は誰もまもってはいくれない。自分で守るより仕方がない。そのためには僕は身軽にして置いて、いつでも、どこへでも逃げ出せるような用意をしておくんだ。わかるかい？……

だから本当を言えば、独身がいちばん良いわけだよ。しかしそれでは淋しいだろう。人間の生活としても片輪だと

思うんだ。男にしても女にしても。……そうするとさっき言ったような、軽い意味の、お互いにあまり重苦しい責任なんか背負わせないような、そういうあっさりした結婚ということを考えるのが、一番合理的なように僕は思うんだよ。僕のためではない。伊吹まさ子の為にもその方がいいと思うんだ……。

わかるかい？」

もっと正直に言えば、僕は女というものを信じていなかった。自分自身をだって、どこまで信じていゝか解らない。女はもっと信じられないと思っていた。

女を信じないということ、伊吹まさ子を愛しているという事とは、別のことだった。愛してはいたが、信じるわけには行かない。僕は伊吹まさ子の人格を信じていた。彼女の誠実さをも信じていた。しかし人間の女というものを信じることは出来なかった。

女は三年たてばきっと気が変わるだろう。気が変わらなくても、性格が変わるだろう。思想も変わるだろう。それは進歩のこともあるし、退歩であることもある。僕は現在の伊吹まさ子を愛しているけれども、変ってから後の伊吹まさ子を愛せるかどうかはわからない。彼女にして見ても、僕に対する気持がどう変わるかわからない。変ったからと言って、

泣いたり怒ったりするのは愚劣だ。変るべきものが変るのは当りまえだ。その時にはあっさり別れようものだ。

普通の結婚は、相手が変らないという誓いを条件にして成立している。自分も変らないという誓いを立てる。キリスト教の結婚式では、(死が二人をひきはなすまで) 変らないことを誓うのだ。こんな不合理な誓いはない。変るのが自然であるならば、変つたらいいじゃないか。その上で、都合がわるかったら別れようじゃないか。

僕はなにも離婚が好きなのわけではなかった。たゞ、別れるということをもっと軽く考えた方がいいだろうと思っていた。

「僕は二つのやり方があると思うんだよ。稲垣君、聞いているのかい?……要するに現在のような油断もすぎもならない社会に生きてゆく為には、先の先まで考えて、どんな障害がやって来ても巧みに身をかわして行けるように、すっかり手順をこしらえて行く生き方と、もう一つは何も考えないで、事件が起つたら出たとこ勝負で、その場その場をこま化して行こうという投げやりな生き方とだね」

「人間社会を信じないという点では、両方とも同じことだ」と稲垣が言った。

「全くその通りだ」

「そして福田君の生活態度は、俺に言わせれば神経衰弱だ。いまの世のなかは平和です。俺たちは自由です。戦争はない。革命もおこらない。有難い時代だ。こういう平和な時代に、なぜそんなに先の先まで心配して、身軽になりたいだの三年契約の結婚だのという、馬鹿なことを考える必要があるんだ。

君は要するに、そういう巧みな論理をあやつって、女に対する男性の責任をのがれようと考えているに違いない。卑怯な男だ。男というものは、女を愛したら一生責任を負ってやるべきものだ。それが男性の誇りであり生き甲斐である俺は思う」

責任を負うことが出来るのに、その責任を回避するのを、責任のがれと云うのだ。僕は、責任を負うことが出来ない世の中だから、お互いに責任を負わせることはやめようと言っているのだ。それがどうしても稲垣にはわからなかった。男は責任を負えと云う。昔も今も、男は男だ。しかし、男をとり巻く社会というものがまるで変ってしまった。それが認識できない稲垣は現代的感覚が欠如していると僕は思った。

思わざる障害

アルプス・カメラは凄く景気がよかったから、会社の重役たちが奮発して、工員のための食堂と娯楽室とを新築してくれた。しかし工員もちかごろは批判的になっているから、素直によるこぶ者ばかりではなかった。

「これだけの建物をこさえるのにいくらかゝるかねえ……鉄筋だろう、これは。……何坪あるんだ。三百坪じゃ利かねえな。それに椅子、テーブル、いろいろな備品をすっかり入れたらざっと五千万円だ。もっとかも知れねえ。工員が全部で二千五百人だからな。建築費を現まで分配してくれたとしたらひとり二万円は確かだ。俺たちはなにも、飯を食うのに食堂なんか無くってもいゝんだよ。いままでは誰だってみんな自分の持場で弁当を食っていたんだからな。食堂くらいでごま化されちゃいけねえよ、ほんとにさ」

しかし食堂の昼食はなかなか評判がよかった。一人前四十円で、そのうち二十円は会社の補助だった。差引二十円だけが工員の支出になって給料から差引かれる。汁と飯と、それにひと切れの煮魚、あるいはコロッケ、または肉の煮こみなどがついていた。

食堂の隣には五つの小部屋があって、音楽室、図書室、喫茶室、映写室、相談室になっていた。相談室というのは身辺の事件一切、借金のこと、病気のこと、法律相談、結婚相談、勤務上の希望、その他何でも工員たちの相談に乗ってくれるという部屋であった。

或る日僕は昼食のあとで喫茶室にはいり、ミルク・コーヒーを飲んでいた。隣の音楽室は防音が不完全だったから、へたくそなクラリネットの音がきこえていた。女子工員がひとり入って来た。グレーの制服を着ているので顔を見なくて誰ともわからない。僕はぼんやりしていた。女工は僕のところへちかづいて来て、

「あのね……」と言った。「はなしが有るのよ」

伊吹まさ子だった。心配そうな表情をしていた。

「どうしたんだ」

「わたし、あの事を郷里に言ってやったのよ。そうしたら母が、心配だから上京するって言うの。福田さんに一度会